

建物が語る120年の歴史展



今年1月から町内各地を巡回した歴史移動展「標茶町郷土館 その建物の謎」で展示できなかった写真パネルなどの新資料を加え、GW期間限定で再展示します。たくさんのご来場をお待ちしています。

- 期間 / 4月28日(木)～5月6日(金)
- 場所 / 塘路湖エコミュージアムセンター
- 入館料 / 無料

大川のほとり

—郷土館だより(第49号)—
☎487-2332

開館時間
午前9時30分～午後4時30分

郷土館より
一筆啓上

今年の冬は雪が少なく、春の訪れが早いように感じます。北国に住むようになって、草木の芽生えだけでなく、湿った空気や鳥のさえずりなど、春を敏感に感じるようになりました。(辻)

男で、弘化元年(1844年)7月7日に生まれました。明治10年12月の警視庁懲役署「署中配置表」に署長小野田元熙の部下、記録掛・一等警部補として在職した記録が見られます。小野田は欧州の監獄制度を視察し獄内実務に整備と集治監の建築指導に携わった人物で、八田がその後監獄行政に携わった事と関係があるのかもしれない。

明治25年4月18日、八田は北海道集治監空知分監長として着任し、4カ月後の8月17日に釧路分監長として標茶に赴任します。このとき八田は48歳でした。当時、釧路分監に看守として勤務していた駒澤和吉郎は、後に回顧談として八田のことを語っています。

「八田哉明は、明治26年8月単身着任された。官舎に小使と住み自炊していた。従来制圧されていた囚人に対し精神教育を取り入れた。謹厳高潔な人でした。明治28年十勝へ転住したと記憶しています。」

戸籍謄本によると、(妻)イツ、(長女)マサ、(長男)嘉明、(次男)熙、(次女)キクの6人家族でした。八田が勤務した明治25年、28年は、標茶が明治時代に最も栄え、また釧路分監の囚人数も最も多かった期間です。明治27年、標茶は人口5,591人を数え釧路を凌ぐ大きな市街として発展しました。同時に囚人数も2,285名と最も在監囚人数の多い年となりました。釧路分監の収容人数は1,200名だったため、定員の1.8倍を収容していたこととなります。この時期、囚人を戒護するため看守も多く採用され267人が勤務していました。

八田の業績として残されているのは、十勝分監設置に伴う事業の推進です。明治25年4月より釧路分監の囚人を使い大津(現豊頃町)か



釧路分監時代の八田哉明

今回は、北海道集治監釧路分監(＝当時の釧路集治監が名称。以後釧路分監と略します)の第4代典獄として活躍した八田哉明をご紹介します。八田に関する資料は少ないですが、残された資料を元にお話を進めていきます。

八田は旧静岡藩士八田哉幸の長



釧路集治監第四代典獄

八田 哉明

釧路集治監人物伝

13

「愛は一方的？」

いつのことだったか、花が大好きだというある女性からお電話を頂きました。「最近、アツモリソウ※（絶滅危惧種）がめっきり見なくなったというじゃない。でも私が見に行ったら、あったのよ！それも3株！」「それはすごいですね！」私も隣町にアツモリソウがあるという話は聞いていたのですが、実際に見たことはなかったの、興味がわきます。「ああ、私は花に愛されているんだわ！」ってうれしくなって。」聞いている私もわくわくします。「とってきて、お庭に植えたの！」「……………」あまりの無邪気な様子に、こちらは二の句がつけられません。その方は電話の間中、あちこちの山で採ってきた珍しい植物について語ってくれましたが、ああ、こうやって希少な植物が絶滅していくのだな、とこちらは背筋が寒くなる思いでした。

盗掘などというにはあまりにも悪気がないのです。でも花が大好きで、その花が減ったと知っているならば、なぜその花が減ったのかももう少し思いを巡らしてくれたらいいのに、と思いました。

どんなに相手を愛しても、相手も都合よく自分を愛してくれるとは限らない、愛は一方的なものだと自分に言い聞かせ、でも好きならせめて相手が望むことは何かを考えて、時に自分の行動を抑える、これは花でも人でも一緒ではなからうか？と考えてしまいました。

※本町では未確認。

標茶で見られる、
四季折々の旬な
生き物を紹介します。

■名前／ウン

*Pyrrhula
pyrrhula*
(アトリ科)

■見られる時期／

周年

■よく見つかる

場所／森林

■魅力／本当にウ

ソという名前の

鳥です。「フィッ、フィッ…」という鳴き声を口笛に見立て「うそぶく（口笛を吹く）」からきているといわれています。モノトーンの体に喉から頬が赤く、大変かわいい鳥ですが、サクラの花芽が大好きなので、お花見を楽しみにしている人には迷惑な存在かもしれません。ちなみにこの赤い部分が喉だけではなく、胸や腹まで赤いウンもいて、それを「真っ赤なウン」とふざけて呼ぶ人もいます。



ら新得に至る道路工事が行われました。この道路は、開発の遅れていた十勝地方に安定した輸送道路を作るために行われたものです。同年8月に釧路分監へ赴任した八田は、同年10月に北海道集治監本監典獄大井上輝前らと共に十勝分監建設のため、踏査しました。十勝で開拓を進めていた晩成社の依田勉三と渡辺勝が同行し、十勝分監建設予定地を現在の帯広市街緑ヶ丘公園を中心とした一帯に決めました。釧路分監における囚人を使った最後の大規模な外役（監獄外での労働）となった大津からの道路工事は、明治26年5月までに伏古（現芽室町）まで完成しましたが、予算の関係で打ち切りとなりました。十勝分監は当初の予定地にて建設工事が行われ、途中マラリアが発生するなど困難な工事でしたが、明治27年10月にはほぼ完成しています。

八田は明治28年4月6日に十勝分監へ転出しました。十勝分監の用地選定から関わった八田は釧路分監の経験を生かし、十勝分監の礎を築きました。後に十勝分監は農業監獄と呼ばれるようになり、十勝の農業に大きな影響を与えました。

八田は、明治31年8月に空知分監へ再び異動となりますが、2カ月後に非職となり退官します。翌32年4月愛媛県監獄署長となり明治34年に病气により休職（その後退職）しました。没年は分かっています。八田の長男嘉明はその後官僚、政治家として大成し、満州鉄道副総裁などを経て、東条内閣の元、最後の鉄道大臣となりました。なお八田嘉明が鉄道省鉄道事務官時代に、釧路線敷設工事が行われ標茶まで開通しています。釧路線敷設を通じ父の勤務地標茶を思い出したのではないのでしょうか。



釧路分監文書 出勤御届（釧路刑務所蔵）
八田分監長宛に、看守が病欠から職場復帰したことを伝えた文書。